

令和6年度  
中野市立豊田中学校  
被爆地派遣事業報告書（広島市）



① 「原爆資料と被爆体験者のお話から」

山口 煌

② 「広島のみとめ 一戦争をなくすためには」

稲田 茜

③ 「ひろしま子ども平和の集いに参加して」

畠山 りの

# 原爆資料と被爆体験者のお話から

豊田中学校 3年 山口 煌

僕たちは8月5日に広島平和記念資料館に行きました。資料館にはボロボロの子どもの服などがありました。そして原爆の被害に遭った人たちや、ケロイドで苦しむ人の写真などがたくさんありました。その中で特に印象に残っているのは、両腕のない子どもの写真でした。その子どもはまだ僕と同じくらいの歳なのに、とても残酷に思いました。



8月6日には、ひろしまこども平和の集いに参加し、被爆者の梶本さんのお話をお聞きしました。梶本さんの話によると、原爆が投下された瞬間に建物が崩れ、がれきの下敷きになってしまい、動けない状態だったそうです。火が迫ってくるため、がれきに挟まれた足を引きずり出して、逃げ出したそうです。同じようにがれきから出てきた友だちと、あたりを見わたすと、建物は全部崩れていました。さっきまでは人がいて建物があり、平和だった日常が、一瞬にして消えてしまったのです。道には火傷を負いながら逃げてくる人たちや、力尽きて亡くなった死体だらけだったそうです。けがが重傷で歩けない友だちを、火災から逃れるために、安全な広場まで連れていく必要がありました。友だちを運ぶとき、足元には、内臓が出ている人、目が飛び出ている人など、多くの死体があったため、仕方なくその死体を踏みわけながら進みました。広場にいる生存者の多くは、原爆の高温の熱で皮膚は剥がれ、肌垂れ下がり、人なのかどうかもわからないくらいひどい状態だったそうです。水を欲しがっている人がいても、飲んでしまうと喉が腫れ呼吸ができなくなり死んでしまうため、水をあげることもできずにいました。原爆が落ちてから少し日が経っても、周りには死体があり、川は死体で底が見えない状態だったそうです。

梶本さんが目にした状況は、死体が周りにあるという異常な状況だったことが分かりました。その死体を踏んで進んだときの感覚、におい、そのときのご本人の気持ちも話してくださいました。この話を聞きながら、自分なりに想像してみました。そしたら吐き気がしてきました。想像したくないくらい、グロテスクで残酷なことでした。また、もし自分が火傷を負って、水が死ぬほど欲しいけれど飲んだら死んでしまうという状況に陥ったらと考えると、原爆で死んでしまっていたほうがましだと考えました。そこまで思わせてしまう原爆は、とても恐ろしいです。平和に暮らしていた日常が一瞬にして消えてしまった原爆、戦争というもの、絶対に起こってはいけないことだと、改めてわかりました。

この二日間に見た資料やお聞きした体験談から強く感じたことは、これほど悲惨で生々しい状況を作ったのが、たった一発の原爆だということです。もう二度と原爆が使われてしまわないために、その恐ろしさを友達や家族に伝えていきたいと思います。

## 広島のみとめ ―戦争をなくすためには―

豊田中学校 3年 稲田 茜

戦争をなくすためにはまず、今、戦争はどんなに怖くて酷いものか、自分ごとのように考えるべきだと思います。

右のグラフは、とある県のアンケート結果です。このグラフでは、第二次世界大戦の終戦日を知っている人は半数ほどしかいません。さらに終戦79年目を迎え、被爆者の方の平均年齢が85歳になり、いつかは本当の戦争や被爆を体験した方が一人もいなくなってしまう。

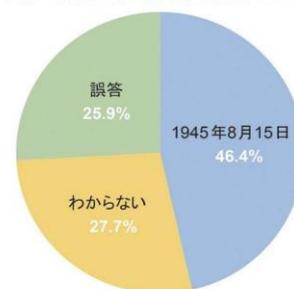
もしこのまま戦争を自分ごととして考えぬまま、私たち子どもが大人になってしまえば、戦争に無関心な社会になってしまうかもしれません。

そのようなことにならないよう、子どもたちが今のうちに戦争について関心を持ち、戦争の恐ろしさを知って、「この歴史を忘れてはならない」「二度と戦争を起こしてはならない」と思う人が増えてほしいです。しかし私一人では、周りの人に戦争の悲劇を伝えるのにも、核兵器の非情さを伝えていくのにも、限界があります。

その中で私はこんなふうに学んでほしいという願いがあります。まずは、紹介した県のように、戦争に関してのアンケートを中高生中心に実施してほしいです。戦争について知る前に、自分は今のどのくらい戦争に対して知識があるのか知っておくことは大事だと思います。次に、学校の中で広島と長崎の原爆被害について知る機会を設けられたらいいと思います。広島と長崎で原爆が落ちたということだけではなく、戦災孤児についてだったり、原爆で傷を負った時の痛みだったり、一瞬で目の前から無差別に命を奪われていく絶望感だったり、当時のことを鮮明に感じられるようにしたいです。動画や被爆体験記朗読など、できるだけリアルに戦争の脅威を伝えたいです。さらに、「原爆を落とさなくても戦争は終わったのか」など原爆について自分の意見をもつことで、自分ごとのように考えることができると思います。

最後にまとめとして、戦争をなくしていくために私が最も大切だと思うことは、戦争について学んだ後に周りの人に伝えて繋げていくことです。私もせっかく広島へ行き、被爆者の方のお話をたくさん聞いて直接戦争について学ぶという貴重な体験ができたので、友達や家族に、原爆や戦争のことについてどんどん話していこうと思います。

日本の終戦の日は何年何月何日ですか？



山口県周南地域日刊新周南電子版より  
<https://www.shinshunan.co.jp/news/report/other/202208/016467.html>

# ひろしま子ども平和の集いに参加して

豊田中学校 3年 畠山 りの

8月6日に広島で開催されたひろしま子ども平和の集いに参加しました。このイベントでは被爆体験講話、詩の朗読、中学生の取組発表など、さまざまな内容が盛り込まれていました。



被爆体験講話では、梶本淑子さんの自らの体験を通して戦争の悲惨さや平和への願いを聞きました。



当時、私たちと同じ中学生の梶本さんは爆心地から2.3キロほどはなれた工場で被爆しました。中学生でありながらも『お国のため』に工場で働いていました。原爆が投下され爆発で倒れてきた機械の下敷きになった状況から、近くにいた友だちと共に生きるために奮闘しました。梶本さんの話によると、家族に会うために家まで必死に歩く道中では亡くなった人が山積みになっており、火葬される時のなんともいえない不快な匂いにも、死体がそこら中にある状況にも耐えました。感情もなくなりかけた時に、お父さんに出会えた喜びは今でも忘れられないと語ってくれました。何十年前の話なのに、こんなにも鮮明にその時の感情や匂い、情景を思い出せるなんて、どんなにこの戦争が残酷だったのかと考えさせられました。そのほかにも話の中で私の心に残ったのは、「こんな残酷な歴史でも忘れられたら繰り返されてしまうので、次の世代へ歴史を伝えることが大事なんだ」という言葉です。知るだけでなく、行動に起こし世界に知らせていくことが重要なんだなと思いました。

また、詩の朗読では、被爆体験や平和への願いを詠んだ詩が朗読され、短い文章の中でも被爆者の当時の思いが伝わってきました。子どもの純粋な平和への強い願いが込められていました。中学生の取組み発表では、全国でどのような戦争があったか、学校ではどんな取り組みが行われているかなどの発表でした。学校の生徒全員で千羽鶴を折り、どんな思いが込められているかを伝えていた学校もありました。

このようなイベントは、広島への平和への思いや被爆体験を次世代に伝える大切な場となっています。こうして中学生も戦争や平和について考え、未来を創るための一歩を踏み出すきっかけとなるんじゃないかなと思いました。今回の集いで感じたことを胸に、私たちも平和を願い、過去の歴史を決して忘れずに伝えていくことの重要性を再確認しました。